いたやん 韋駄天の記

劇作家 岡部耕大 ㉖

誰もが西鉄ファン

まともなグラブもない軟球の三角ベースボールである。炭鉱の子も商店街の子も農家の子も、ごちゃ混ぜであった。布地のグラブを持っている商店街の子がいて羨ましかった。母の手縫いだそうである。和服に割烹着が似合う、まるで国語の教科書の挿絵で描かれた母のような品のいい母であった。その母は参観日にも和服で日傘を差して出席していた。「頼むばい、おふくろよい」であった。まだ、サッカーボールを蹴る少年はいなかった。子どもに構う親もそんなにはいなかった。冬もかじかむ手で野球をした。昭和20年代末から30年代前半は西鉄ライオンズの全盛期であった。

西鉄ライオンズは他のチームから「水爆打線」と恐れられていた。西鉄打線の中核を担ったのは、3番「四国の怪童」中西太、背番号6。4番青バットの「天才打者」大下弘、背番号3であった。『西鉄の選手は朝まで中洲で酒ば飲んどっても、寮に戻ったら素振りをするとぞ」「照れ屋の大下は人前では練習嫌いのように装っとるばってん、陰の努力ば惜しまんとぞ」「大下のニックネームはポンちゃんぞ。ポンポンとホームランば打つけんポンちゃんぞ」。少年の誰もが西鉄ライオンズファンであった。平和台球場は歌い踊る炭鉱マンと「炭坑節」でいっぱいであった。

少年の一人が北朝鮮へ帰ることになった。帰れるようになったのである。野球仲間は家から米を持ち寄って、公民館で混ぜご飯の送別会をした。おかっぱ頭の少年の姉が深とした挨拶をした。「我が祖国は」。少年は汽車で新潟まで行くといった。わたしは少年の一家を松浦駅で見送った。少年の果てしのない旅が始まったのである。

人は忘れるから生きていける。または忘れたふりをして生きている。わたしも和子姉さんを忘れたふりをして野球ばかりしていた。しかし、うわさは耳に入る。我が家で、おしゃべり好きの親戚のおばさんが「東映のスカウトマンが和子さんの家ば訪ねて来らっしゃった。東映のニューフェイスたい」と得意そうにいっていた。

（松浦市出身）

おかべ・こうだい　1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。